

英語教育改革試案

A Tentative Plan for Improving English Language Teaching

齋 藤 栄 二
SAITO Eiji

The purpose of the speech the writer gave at the First International Symposium sponsored by the Kansai University Graduate School of Foreign Language and Research is to propose a tentative plan for improving English Language Teaching from elementary school through university in Japan.

Two points were emphasized:

1. The role and importance of so-called "English for greetings."
2. The necessity of establishing the English education system where students can master English required for discussing international affairs in the era of internationalization.

1. ことばは時には暴力を押さえる

私の尊敬する古川法子先生の話から始めたい。先生がまだ若い女性であった時の話である。(ついでですが、今でも先生は十分にお若い—筆者注) 時間は50年ほど前に遡る。50年前というと日本は戦争に負けた直後で、マッカーサー元帥がわが国の統治にあたっていた。そして進駐軍と呼ばれたアメリカ兵が東京の街中を闊歩していた。治安状況は決して安心できるようなものではなかった。近隣の若い娘さんがアメリカ兵に連れていかれたなどという怖い話が伝わってくるのも稀ではなかった。

その頃、古川先生は間もなく大学生になる年令を迎えていた。そして大学受験準備のために講習会に通いはじめた。その講習会で英語を教えていた先生は、「アメリカ兵に絡まれたり嫌なことをされたら "It's very rude of you!" と大声で言いなさい。」と教えたそうである。素直な学生であった先生は、ときどき人のいないところで "It's very rude of you." とその発音を繰り返し練習したそうである。その後は直接先生に語っていただく。

その日いつものように講習会は午後8時過ぎに終わった。電車は勤め帰りの人や学生などで込み合っていた。背の低い私はつぶされそうになりながら吊革にぶら下がり、ほんや

りと外を眺めていた。突然何かが私の手をつかんだ。びっくりして見上げると若いアメリカ兵が3、4人にやにや笑いながら見ている。手を振りほどこうとしてもできない。英語で何か言っているが、悔しいけれど分からない。周囲の人たちは気の毒そうに、そして怖そうに眺めているだけだった。ますます手を強くつかまれ、どうしてもはなしてくれない。そこで思い切って“*It's very rude of you!*”と叫んだ。特に *very rude* に力を入れて、2、3回繰り返した。

さてアメリカ兵はどう反応したか。驚いたことに先生の手をパッと離れたそう。古川先生には、彼が仲間の兵にむかって「この人は *rude* と言っている」と伝えているように聞こえた。今、手もとの英和辞典（ジーニアス英和辞典第2版：大修館）を見ると「*rude*：〈人、行為などが〉〈故意に他人への配慮を欠いて〉失礼な、無礼な、不法な」という意味が、一番最初に出ている。彼らとて兵士として日本にやってくる前には、アメリカで育ち、アメリカの学校に通い、アメリカの教育を受けてきたであろう。そのどこかの段階で *rude* の持つ意味内容を教えられたことがあったに違いない。そしてその *rude* が使われる状況というものを経験してきているはずだ。だからこそ *rude* という単語を耳にしたとたんに思わず手を引っ込めたのだと思う。

そこで考えたいのは、*rude* を聞いて手を引っ込めた動作である。恐らく古川先生が自らの物理的な力に頼っただけで手をふりほどくことは不可能であったろう。だいたい大男のアメリカ兵と多分150cm前後の古川先生とでは勝負にならない。そして人間は、こちらが力で向かうとそれ以上の力でむかってくるという性質を持つ。しかしアメリカ兵は *rude* という単語を聞いた。その単語はアメリカ兵の中に、自分の行動に対する反省を一瞬にして強いたのである。ややおおげさに言わせてもらうと「ことばが野獣を人間に変えた」のではないか。私はこういう時、言葉の持つ力の不思議さを思う。これはもはや一種の魔法ではないか。かくして言葉は時には暴力を回避する力を持つのである。

ここからは余談だが、あの戦後の状況の中で、*It's very rude of you.* の意味を教え、その発音練習を古川先生にさせた英語の先生とはどういう方だったのだろうか。英語の教師としては、ちょっと会って見たいような気がする。その先生は、まさに時代の状況に合わせたキー・センテンスを教えた。これは別な言い方をすれば、多少ふざけすぎかも知れないが ESP (English for Special Purpose) の授業であった。なにせ *It's very rude of you.* は特別な状況において見事にその役割を果たしたのだから。

2. エレファント・マン

エレファント・マンの話をご存知だろうか。エレファント・マンは古川先生の実話に対して

映画の話である。エレファント・マンと呼ばれた心優しい青年がいた。ただ彼は奇病にかかってしまった。象皮病である。皮膚は象の皮のような様相を呈し、顔の骨も変形してしまう。一種の奇形であり、怪異な容貌となる。他人に見せられたものではない。そこで彼は家から外に出たがらない。どうしても外に出なければならぬときは顔を包帯でぐるぐる巻きにする。自分の顔を見られることを一番恐れる彼は、包帯の上から帽子を深くかぶり、その上にサングラスとマスクをする。そして、人目を避けるようにして道路の端の方をスツ、スツと歩く。

ところが悪いことには、ある時駅の近くで、通行人の一人に顔を見られてしまった。「怪物がいるぞ!」というのがその通行人の反応である。彼はそっとエレファント・マンの後をつける。好奇心である。そのうちエレファント・マンの後をつける人間が1人、2人と増えてくる。

その気配を感じて青年は走り出す。逃げようとしたのである。逃げれば追いかける。それが群集心理である。逃げるエレファント・マン。追いかける群衆。ところが悪いことには、彼は煉瓦の壁に囲まれた袋小路に入り込んでしまった。力なく立ちつくす青年。遠巻きにしてじっとエレファント・マンを見ている群集。その緊張感を破るように1人の男が小石を拾ってエレファントマンめがけて投げつけた。こうなったらワッとわれ先に群衆は石を投げ出す。自分とは違った異質でわけのわからないものに対する攻撃である。群集という言葉は英語ではcrowdとmobを思い出すがmobは暴徒の群れの意味である。群集はエレファント・マンを前にして、まさにそのmobになってしまったのである。青年は大石、小石を全身に受け血を出しながら思わず叫ぶ。

「助けてくれ! 俺は人間だ!」

青年のこのことばに群集は、ハッと我にかえるのである。自分たちは一体何をしていたのだろうか。人々は理性を取り戻すのである。ソッと人々は石を地面に置く。そして1人、2人とこの場から去っていくのである。

私はこのシーンが妙に印象に残った。今となっては映画のシーンの印象が私なりの画面を作らせているのかもしれない。なぜ印象に残ったのだろう。「助けてくれ! 俺は人間だ!」という人間のことばを聞いて、暴徒は理性を持った人間の集団に一瞬にして戻ったのだ。人間が人間のことばを聞いて理性を取り戻す。そこに私はことばの力というものを感じとったのである。これはやはりほとんど魔法に近い。

私は要するに何を言いたいのか。それはことばの持つパワーである。もちろん以上2つの例は、ことばの力がプラスの方向に働いた場合である。ことばはプラスにだけ働くとは限らない。「あのひとことを言ったばかりに別れなければならなくなった男と女」ということもある。「売りことばに買いことば」という成句もある。これはことばがマイナスにも働くことを示している。ことばは、場合によっては諸刃の剣なのである。しかし少なくとも暴力による問題解決に訴えないとすれば、紛争解決の手段としてはことばしか人間には残されていない。であるとす

れば、ことばをプラスの方向に動かせることこそが人間の知恵ではなからうか。

3. 比嘉平治

今は、皆さんとことばの威力について考えている。古川先生の例も、エレファントマンの例も、それはことばが個人を救った例であった。これから皆さんにお話するのは、ことばができたために1人で1,000人以上の人の命を救った男の話である。この話は他でも紹介した。「より良い英語授業を目指して」大修館)しかし、話の展開の必要上、ここでその要点だけを再録したい。場面は沖縄である。

では沖縄で何が起こったのか。1945年4月1日、アメリカ軍は170艘の大型艦船と183,000人の兵力を持って沖縄本島への上陸を敢行した。その勢いはまさに太平洋を荒波のごとく北上してきたというのにふさわしい。日本が敗戦に追い込まれる4ヶ月前のことである。

その時のアメリカ軍の上陸地点となったのが、読谷村(よみたんそん)の西海岸にあった波平の村落である。私も波平に行ってみたが、海に面した静かな村落である。そしてその海岸は沖縄独特の澄んだマリン・ブルーの空の下に静かに波が打ちよせていた。ところがアメリカ軍資料のビデオで見る限り、183,000人の兵士と170艘の大型艦船でこの美しい海岸が1945年の4月1日には真っ黒になった。波平がその上陸地点となり、村落の人々は米軍に追い詰められた。日本軍はそのずっと後方に守備陣をしいていた。こういう状況で人々はどうしたか。方法は何かあったのか。地下に潜ったのである。それ以外に方法はなかった。沖縄の地下には鍾乳洞が網の目のように走っているそうである。沖縄のことばで鍾乳洞をガマと呼ぶ。波平村落にはこのガマがあった。チビチリガマとシムクガマである。まずチビチリガマである。入ってみたかったが、まだ入る許可は出されていない。なぜだろう。聞いてみると「いまだに人骨が出るから」というような答えであった。このガマは100人も入ればお互いに肩がふれあうくらい小さいそうである。ここに避難した人の数は142名。そのうち82名が集団自決によって命を落としている。

一方シムクガマである。こちらには入ることができた。大きなガマで1,000人以上がここへ避難した。形は瓢箪に似ている。入り口が狭く、その入り口に続いて最初に大きな空間があり、またその空間が小さく絞り込まれ、その奥にもうひとつ大きな空間がある。地面をチョロチョロと水が流れていた。ガマに入ったのは午後2時頃だが、案内の松永さんが私たちが手に手に持っていた懐中電灯を「ちょっと消してみてください」というので一斉に消した。まさに漆黒の闇。このシムクガマもチビチリガマも4月2日には同じ状況下に置かれていた。それは当然である。両方のガマは600~700メートルしか離れていないのである。ところが1,000人以上が逃げこんだシムクガマで命を失った人は1人もいない。どうしてこのような違いが起こったのか。それはシムクガマに比嘉平治という1人の人間がいたからである。

4. 2つのガマの運命を分けたものは何か

両方のガマには何が起こったのか。まずチビチリガマからみよう。チビチリガマで集団自決が起こったのはアメリカ軍が上陸した翌日の4月2日のことである。2日になるとチビチリガマの入り口にアメリカ兵の姿がチラチラ見えはじめる。そのアメリカ兵の姿を見てガマの中は極度の混乱に陥った。なにせガマの中には民間人の村人ばかり、兵隊は1人もいない。その上、女、子供、老人が大部分である。岩波ブックレットに下嶋哲郎さんがこのへんことをまとめておられる。

この混乱のさなか、次のように一喝した若い女性がいた。

「神国日本の民たるものがそのうろたえようは何かっ！アメリカを恐れることは何もない。竹ヤリで戦いなさい。」

その声で村人たちはハッと我に返った。そして闘志もあらわに手に手に竹ヤリを持って入り口に殺到した。女も子供も老人も突撃したのである。中には包丁を振りかざして走る少女もいたという。自分の子供に竹ヤリを持たせ

「行け！」

と命令した母親もいた。

「うちらは大和魂と竹ヤリで勝てる」というわけだ。

村人たちは

「殺せ！」

「やっつけろ！」

「天皇陛下万歳！」

と口々に叫んで突撃した。私は思うのだが、人間というのは命をかけなければならないような極限状態にあるとき、自分の口から叫ぶ呪文のような叫びによって自分の理性を凍結させてしまうのではなからうか。

しかしガマから飛び出そうとして、村人たちが崖の上に見たものは銃を携えてずらりと並んだアメリカ兵の姿であった。だが一度動き出した村人たちの勢いは止まらない。そのアメリカ兵にむかって2メートル程の長さの竹ヤリを7メートル以上、上にいる彼らめがけて

「ヤーッ！ヤーッ」

と突き出した。アメリカ兵の方も抵抗するものには容赦しない。なにせ自分たちの命がかかっている。崖の上からはたちまち機関銃や手りゅう弾の雨がふりそそいだ。もうこれまでと諦めた村人たちはチビチリガマの奥にできるだけ身を寄せて集団自決という自殺に走ったのである。集団自決というと聞こえはよいが、要するに覚悟の上でお互いに殺しあったのである。母

親は自分の子供の胸に包丁を突きつけるようなことをしなければならなかった。私はその場にいた訳ではないが悲惨を極めたのではなからうか。このようにして142名中82名が命をなくした。そのうち6割は子供だったのである。

5. お前ら竹ヤリを捨てろ！

一方シムクガマだ。こちらには人数が1,000人以上いた。追いつめられたシムクガマの村人たちの間にも緊張感が高まった。その中で行動の口火を切ったのは子供警防団員である。といっても主力は小学生や中学生である。ガマの奥の方から、チョロチョロと流れている水の上を「バシャ、バシャ」

と突っ走って数十人の子供たちが手に手に竹ヤリを持ち突撃を開始した。その時だ。大声で立ち上がった人がいた。沖縄ことばで

「イッター！ 竹ヤリ、ウッチャンギー！」（お前ら竹ヤリを捨てろ！）

と叫んだのだ。比嘉平治さんである。彼の仁王立ちのあまりの迫力に押されて、少年たちの足は思わず止まった。村人たちは大騒ぎとなった。その時比嘉平治さんは叔父の平三さんを伴い「アメリカーと話し合ってくる」

と言った。村人たちはあっけ（呆気）にとられた。その村人を背後に残して2人はガマから出て行った。彼ら2人の行動は村人たちの理解を全く超えていた。

「外にアメリカ兵が大勢待ち構えている。殺されに行くのと同じではないか」

というのが村人たちの常識であった。

ところが驚いたことには、しばらくして2人は無傷で帰ってきたのである。そして村人たちに向かって言った。

「アメリカーと話し合ってきた。アメリカーは手向かいしない限り殺さないと約束した。戦争（イクサユー）でアメリカ兵がやられるのは、日本の兵隊がいるからだ。このガマには日本の兵隊がないことはわかっている。だから攻撃しないとやっている。大丈夫だ。命を大切にしようじゃないか。さあガマを出よう。」

私は実は「命を大切にしようじゃないか。さあ、ガマを出よう。」という比嘉さんのことばに心をうたれた。小泉首相ではないが「感動した」のである。このことばを皆さんに伝えたいために、ここまで書いてきたようなものだ。

実はアメリカ兵と比嘉平治さんのやりとりを8ミリカメラで撮っていた人がいた。米軍第6海兵師団付きカメラマン、ジョン・C・マクマレンさんである。私は南風（はえばる）文化センターに行ってそのフィルムを映写していただき見てきた。強い陽ざしの下、カンカン帽をかぶったひげだらけで頬のこけた平治さんが地面にしゃがみ込み、大男のアメリカ兵に囲まれている。そしてさかんに何か喋っている。どんな英語を話したのだろうか。英語の教員としては

興味があったが音声は入っていない。

その後彼は別のガマ、アガシムクに行き80人以上の村人を説得した。彼は、この行動によって実に1,000人以上の命を救った。今は救われた人々のお孫さんの世代が沖縄で豊かに命を受け継いでいる。

6. 英語、異文化理解、勇気

なぜ比嘉平治さんには、こういうことができたのであろうか。平治さんは英語が話せたのである。そのことがすべてのスタートになったことは間違いない。戦場では、その土地の原住民に兵隊が変装してアメリカ軍に攻撃をしかけるというのはよくあるそうだ。そういう緊張感の中では、アメリカの兵士にわけのわからない日本語を叫びながら近づいてくる人物がいたら、たちまち射殺の対象となる。そうでなくともチビチリガマではアメリカ軍に対して突撃を敢行しているのである。だが、ガマから出てきた人間の口から叫ばれているのは英語であった。アメリカ兵にも理解はできる。油断しない警戒態勢の中で、アメリカ軍の方でも「ちょっと待て！英語で話しかけてきている」となったに違いない。そこから交渉がスタートする。だから英語のできる平治さんがいなければ1,000人以上の命はチビチリガマと同様の運命を辿っていたのではなかろうか。

ところ、英語が出来たら1,000人以上の命が救えたか。私にはそうは思えない。平治さんには「アメリカ兵は民間人を殺さない」という理解があった。この信念があったからこそ平治さんはガマを出る決心ができたに違いない。今の言い方ですれば異文化理解である。1,000人以上の命を救えた要因の中には異文化理解を加えなければ不完全なものとなる。

それでは英語ができて、異文化理解があれば1,000人以上の命は救えたか。まだ不十分だと私は思う。では何が必要か。勇気である。1歩間違えば平治さん自身が殺されるという厳しい状況にある。人の命など戦場では銃の引き金を1回ひくだけで終わりとなる。そこに自ら向かっていくには勇気がなくてはできることではない。

まとめてみると

- 1) 英語ができること
- 2) 異文化理解
- 3) 勇気

ということではないか。私たちは、恐らく比嘉平治さんの経験したような極限状態を経験することはないであろう。しかしながら上にまとめた「英語ができること、異文化理解、勇気」はこれからの世界に生きる世代にとって根本的な要件ではないか。

7. 命を賭けた民間外交

私は比嘉平治さんのおこなったことは、1民間人の命を賭けた外交交渉であったと思う。そこには、普通の外交交渉の舞台となる豪華なテーブルもなかった。フラッシュを浴びた記者会見もなかった。贅を尽くした晩餐会もなかった。あったのはカンカン照りの下の地面だけである。しかしそこで行われたのは紛れもなく命を賭けた外交交渉ではなかったか。そして外交交渉の本質というものはそういうものではないのか。それがここに現れている。その本質とは何か。それは

「ギリギリのせめぎあいの中で、人の命と安全を保障する」

ということだ。この本質的な働きが成功してこそ平和な社会が見えてくる。このことは個人の場合でも、国と国の場合でも同じである。

ところでその直接の責任を担うのは私たちの国では外務省である。そこで問いかけたい。今日の外務省のお役人にそういう目的意識は濃密にあるのか。

読売新聞の編集手帳から一部抜粋する。

(外務省は) 自浄能力のなさを棚にあげて、ずいぶん威勢がいい。(中略) 機密費流用、ムネオ疑惑、瀋陽事件…露見しては隠し、また露見の繰り返しである。(中略) 信頼が地に落ちた日本外交は立ち直るのか。(2002, 7, 17朝刊)

このことに関して岡本行夫氏の発言が私には非常に印象深く残った。氏は外務省北米一課長、首相補佐官などを歴任した外交評論家である。5月27日読売新聞朝刊から彼の発言を抜粋してみる。

1978年のことだ。アメリカ・ロサンゼルスのホテルの小さな部屋。日米間の自由化をめぐって2人は机を叩いて怒鳴りあっていた。つかみかからんばかりの剣幕で。牛場信彦・対外経済相と、シュトラウス・米特別通商代表。しかし、2人は、激しい議論の後は、同じ激しさでそれぞれの国内を説得した。

牛場さんはワシントンの米議会で激しい対日非難にさらされた。しかし、彼は、かばおうとしたシュトラウスを制して立ち上り、「アメリカも保護貿易主義と戦って自由を守れ」と叩きつけるようなスピーチを行ったのである。上院議員たちの間に一瞬の静寂が流れ、次の瞬間、割れるような拍手が起こった。

ところで牛場氏はよく部下を怒った。

根っからの職業外交官だった牛場さんは、厳しい人だった。怒り方も半端ではなかった。駆け出しの外交官だった私も怒鳴られたことがある。

牛場さんの怒りの後ろには、強い愛国心があった。烈々たる気概が目指していた先は、真の意味での日本の国際化だった。

そして最後に岡本氏は外務省にむかって檄を飛ばす。

一連の事件で国民は外務省に緊張感と気概のなさを見た。牛場さんが最も嫌ったことだ。立ち上ってみろ、外務省。できないなら組織の解体しか残らない。

外務省の中に比嘉平治さんの卵はいないのか。いない筈はないと私は信ずる。そういう人々の総決起を強く期待しているのである。それこそ「立ち上がってみろ、外務省」と静かに叫びたい。

8. 人は獣に及ばないのか

ここまでで、私の言いたいことをまとめたい。外交交渉はことばとことばのやりとりで始まる。コミュニケーションである。しかしまことに残念なことではあるが、人間はまだことばのやりとりのみによってすべての問題を解決するレベルまで達していない。ことばで解決できなければ、残されたのは暴力しかない。それが国と国のレベルになれば戦争である。暴力による解決法は今でも人間がしばしば用いている手段ではないか。2001年9月11日のアメリカ世界貿易センターを襲ったテロは暴力の一つの形にほかならない。私は若い頃、英文学者中野好夫の著書に「人は獣に及ばず」という本があることを知った。獣は宗教や信条の違いによって同類を殺すなどということはしない。しかしながら、暴力に訴えることを最後の解決手段にしている限り人類の未来は見えてこない。かくして今世紀最大の人類の課題は、暴力に訴えないで問題処理ができる世界を実現できるかどうかである。これ以上に大きな課題があるとは私には思えない。そして暴力に訴えないためには、コミュニケーションに頼るしか手段は残されていないということはもう一度言っておきたい。

しかしそのコミュニケーションだとてオールマイティーではない。私はプラスのコミュニケーションとマイナスのコミュニケーションがあることを述べた。

私の最近書いたことばに

「憎しみあえば

地獄

親しみあえば

天国」

というのがある。個人の場合でも、その人の幸せはまわりの人との関係によって大きな影響を受ける。そして人間関係が憎悪の上に成り立つと地獄を経験する。親しみあえば春風となる。コミュニケーションとひとことで言っても、どういうコミュニケーションを成立させるかということが重要である。よいコミュニケーションを成立させるためにはそれなりの訓練が必要である。それは個人対個人の場合でも国対国の場合でも同様である。むしろ今は国対国のコミュニケーションということを考えているのであるが、私たちの国はその面において、すでに大きな失敗をしているのである。

9. パール・ハーバー

最近映画館に足を運ぶこともずいぶん少なくなった。ところが昨年(2001年)、東京で仕事をしていた時に、ぽっかりと一日空いた日があった。私は急いで有楽町に出かけた。あそこに行けば何か映画が見られる。何年かぶりで「2館立て」というのをやった。この聞きなれないことば、御存知であろうか。もう40年程前、まだ学生であった頃仲間同士でよく2館立てをやった。映画というのは、もともと1館で1本の映画を上映していたものである。1本立てである。ところが私たちが学生であった頃は映画の黄金時代を迎えていたが、2本立てが流行りだした。1つの映画館で2本の異なった映画が見られるという訳である。時には3本立てなどというのもあった。お金がなくて、時間を持て余していた貧乏学生の私たちは2館立てをしたのである。つまり午後から1館目に行って2本の映画を見る。それから安食堂でカツ丼などで空腹をみたく。あのころのカツ丼はうまかった。なぜあんなにうまかったのだろう。美味しいなどというのとはちょっと違う。それはとにかくうまいのである。さてその後もう1館行くのである。1日で4本の映画を見ることになる。コンビニなんかもなかったので今の学生のように、パートタイムの仕事などに追いかけることもなかった。私たちは見終わった映画についてとことん話しあった。映画が、かいま見せる人生の一端は当時大学生であった私たちにとっては、なんとも新鮮であった。確かに映画は私たちの青春時代を形造る重要な要素であった。自分がまるで映画の主人公にでもなったようなつもりでその生き方を友と深夜まで語りあった。おかげさに言うと、映画を通して人生を学んだのである。今の学生諸君には、そういうゆったりとした時間を持っているのであろうか。

さて懐旧談をしていてもしかたがない。現在の東京の有楽町に戻ろう。現在では1つの映画館で1本である。2館立てをして2本見た。そのうちの1本が「パール・ハーバー」である。もう1本はたしか「猿の軍団」である。(名前に自信なし)

1941年12月7日(日本では8日未明)日本海軍がハワイのアメリカ海軍基地を奇襲した。この奇襲のシーンは特写撮影のためか相当の迫力である。音響の効果のせいか座席の後方から、

日本の戦闘機からの機銃掃射の音がビュンビュン襲って来て思わず頭を引っ込めたくなるような迫力であった。映画に関する限り日本海軍はパール・ハーバー停泊中のアメリカ軍艦を徹底して叩く。「20世紀」（角川書店）でこの状況を調べてみた。

真珠湾を攻撃、アジア・太平洋戦争始まる

「トラ、トラ、トラ（我、奇襲に成功せり）」、ハワイ時間12月7日午前7時52分（日本時間8日午前3時22分）、淵田美津夫中佐は97式艦上攻撃機上から、第一航空艦隊の旗艦〈赤城〉に打電した。その5分後、米海軍ベリンジャー少将は、ワシントンあてに打電する。「パール・ハーバー空襲ヲ受ケル。コレハ演習デハナイ」。

この日午前6時（ハワイ時間）、ハワイ沖の航空母艦から第1次攻撃隊183機が、アメリカ太平洋艦隊の母港ハワイ諸島オアフ島の真珠湾を目ざして発進した。7時49分、真珠湾上空に達した攻撃隊は、猛然と米艦隊に襲いかかった。攻撃は2波におよび、午前9時45分まで続いた。その結果、〈アリゾナ〉など戦艦4隻が撃沈、4隻が大破、ほかに艦艇11隻が撃沈または破壊された（空母3隻は湾外にあり無傷）。オアフ島と湾内のフォード島にあった6つの陸海軍空港基地も空襲され230機あまりの航空機が破壊された。一方、日本軍の損害は航空機29機、小型潜航艇5隻が帰還できなかつただけだった。（中略）

日本国内では午前7時、ラジオの臨時ニュースが米英軍と戦闘状態に入ったことを告げ、一方アメリカでは奇襲から約17時間後、ローズヴェルト大統領が対日宣戦布告を国民に告げた。両国民にとって、この運命的な日は突然やってきたように思われた。こうして、アジア・太平洋戦争が始まり、第2次世界大戦は地球的規模での戦争に拡大した。

このパール・ハーバーが誤りのスタートであったと私は思っている。太平洋戦争の全責任が日本の軍部だけにあったとは、私は考えない。世界はいわば米英を中心とする先進資本主義諸国が中心勢力として一つの秩序を築いていた。ソビエトなどという社会主義国もその時点では、ドイツやイタリアや日本に対抗して英米側にいたのである。そういう秩序の中に、資本主義後進国である日本が登場して来た。軍事力も先進資本主義国家の脅威となる程に増大してきた。先進資本主義諸国は、いわばそういう日本を押さえにかかったのである。ここが勝負どころであった。私たちの国は、厳しい国際情勢下の中で、共存をはかるための外交技術、国際交渉力を持っていなかったのである。遂にこらえ切れずに日本は手をあげた。それがパール・ハーバーではなかったか。その後、日本人は死屍累々を世界の戦場にさらすことになる。国が始まって以来の試練と困難を国民に強いることになった。おおく肉親を失った。

そのことを舟橋洋一氏（朝日新聞）は次のように述べている

「対話」の失敗を繰り返さない

英語の専門家でもない私が、英語の本を書くことにしたのはそれなりの訳があります。それは、英語をたんに英語教育や英語行政の問題としてのみ捉えてはならない。それを、日本の世界との関係、少し大げさに言えば、日本の戦略の問題として考える必要がある、と思ったからです。

戦略の問題とは、世界の中での日本の生き方と処し方の問題です。日本は、どのように世界の中で、自らの理念と国益を表現し、追求し、どのように世界の国々と平和に共存するのか、それをよりよく行うにはどのような世界のシステムを作るべきなのか、それをどう進めるべきなのか、その中で日本は何をするべきか、というテーマです。

これを、誰が、誰と、どのように、行うのか。

ここで英語の問題が重要になってきます。それを遂行するには、国際語である英語のリテラシー（識字能力）とそれを使いこなすコミュニケーションの能力なしには、実際問題としてできないからです。

そうした能力を飛躍的に向上させないことには、日本は、21世紀もまた20世紀と同じ失敗を繰り返すのではないかと、その不安を抱くのです。

東洋の一角にあって、列強の圧迫の下、独立を維持し、近代化を成し遂げ、戦後、再び立ち上がった日本の20世紀の歴史をすべて「失敗」で片づけるつもりはありません。

しかし、日本の失敗と過ちをも冷静に振り返っておくことが大切です。

その中で、ひとつ、日本と日本人が、十分に意識せず、準備をしてこなかったための「失敗」があったという気がしてならないのです。

それは、一言で言うと「対話」の失敗です。

（「あえて英語公用語論」文芸春秋）

次は私が聖教新聞（9月5日）の求めに応じて書いた小論である。

強制を排せよ

—英語選択性の強化を視野に入れる—

人間は、一体いつまで他の人間を殺傷することによって問題解決をすることを続けようというのか。この状況を許しておいては人間どうしの共生による未来社会は見えてこない。人間の殺傷というのは、国と国の間では戦争という形をとる。また昨年9月11日世界貿易センターを襲ったテロもその別な形である。こういう世界を今世紀も来世紀も人間は続けていこうというのか。まさに「人は獣に及ばず」（中野好夫著）である。獣は思想、信条の違いによってお互いに殺しあったりはしない。

人間の殺傷に訴えない解決法はないのか。あるとすれば negotiation しかない。negotiation の原義は「（難所、困難を）うまく切り抜けること」である。それがどんなに

理想論であろうともそれしか方法はない。そしてそれは異質な者どうしの間でコミュニケーションを成立させる努力をするところからはじまる。その手段としてはことばを通しておこなうしか、これまた方法かない。日本の国の将来を考えると、タフな国際場裡をことばを通して生きぬける力を持った若者の養成は必須である。ここにおいて英語をはじめとすることばの教育の分担領域の必要性が出てくる。この点でわが国はどうか。今の状況で十分とは言い難い。私の言うところの「会議の英語」に対応する人材の養成は急務である。

さて一方学校における現在進行中の英語教育である。ここも問題山積みである。学校における英語教育の非効率性が指摘されてから久しい。原因の1つは、事実上英語を全員に強制しているところにある。いわば進めようとしている車に乗りたがらない人間を車に無理矢理に乗せたところ、その乗客は車の上で騒ぎ出した。その状態で車を前に引っ張ろうとして、どれだけ英語の教員がエネルギーの空費をしていることか。現在のシステムはとくに制度疲労を起こしている。「やりたがらない人間を反対の方向に引っ張っていくこと」で効率があがるわけではない。やりたい人間を十分にのばしてやろう。そういういうことに対応できる柔軟な制度を造ろう。まず学びたがっている者を集めたクラスを造ろうではないか。断っておくがこれは選別の思想ではない。選別の思想とは「やりたがる人間をやらせない」時におこる。やりたがらない人間にもムリにやらせるのは強制の思想である。また「～であるべきだ」という「べき論」だけで教育を実施するのも止めよう。そういう積み重ねの結果が今の状況をもたらしているのである。「英語は学習者の意志によって選択させる」という視点をもっと入れるべきだ。柔軟な発想で未来の世代づくりに力を尽くそうではないか。

英語教育という視点から大きな話をしてくれていると思う。聖教新聞にも書いた通り厳しい国際情勢の中で、十分に negotiation のできる人間を国として養成しておかなければならない。それは、勇気と異文化理解力を豊かに持った人間ということであるが、その前提としてしっかりした語学力（今考えているのはさしあたり英語）がなければならない。例えば平田和人氏（文部科学省教科調査官）は次のように言う。

国際化の中で、例えば英語能力が低いとか十分に国際的に活躍できる人材がいなくていったときに、重要な役割を果たすのはおそらく大学だろうと思うんです。TOEFL 1つにしてもそうですし、例えば海外とのコミュニケーションを図ったりする必要がある場合に、その能力を最終的にどこで養成しているかという、大学なんです。教員養成についても、最終的に専門レベルで育成しているのは大学です。

その任務が一体どこまで果たしているのか、あるいはこれまで果たしてきたのか、今後

どういう方向で改善していくのかということ、大学の先生方は自ら語っていただくことを期待しています。

(大修館「英語教育」2002年5月号別冊)

基本的には、平田氏の指摘はもっともである。さらにもう少しレベルの高い英語力養成も含めて、現在の英語力養成システムの再検討が必要である。

さてここまで、少しまとめてみよう。それは国際交渉能力を持った人間の養成が急務であるといったいわばあり方論である。

続いて、次は諸言語の中で特別な地位を占めはじめた英語の位置について見ていきたい。

10. 特別な地位を占めはじめた英語の位置

あるところで講演をしていたときに、私は黒板に大きく1/2、1/3、1/4、1/5、1/6と書いたあと、「現在、地球上で何人に1人の人間が日常的に英語を使っていると思いますか？」と問いかけてみた。数を数える余裕はなかったが多くの人が1/4、1/5のところの手を挙げた。正解は1/3である。現在地球上の人口は54億前後と思われるが、世界総人口の3分の1、約18億という人間が日常的に英語が使用されている環境に生きているという。「ケンブリッジ英語百科」3人に1人というのは、これは驚くべき数である。そして、その多くはアジアにいるという。また去年は、世界中で2億4千万台のパソコンが繋がったそうだが、そこでの交信に使われている言語の80%が英語だそうである。その残りの20%を、フランス語やドイツ語や日本語、中国語、ハンゲル語などのその他の諸言語で分けあっているという状態である。日本語が20%のうち何パーセントのシェアを持っているのか知らないが、例えば情報を手に入れようとした場合、日本語だけしかできない者と英語もわかる者との間には恐らく何十倍という格差ができる。断っておくが、私は今そういう状態が良いとか悪いとかいう価値観の話をしているのではない。事実の話をしているのである。

続いて、英語を使用している巨大人口群を私なりに3つのグループに分けてみたい。

第1のグループは、英語を母語、あるいは第1言語としている人の数である。その数およそ3億7700万人である。この中には、もちろん英、米人、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド人などが入る。第2のグループは英語を公用語としているグループである。こういう国の多くではそれぞれの民族語が話されているが、国の公用語として英語を決めている国である。インドとかフィリピンなどがその中に入る。その数およそ3億7500万人。数の上では第1言語のグループに匹敵する。第3が私たち日本のように英語を外国語として学んでいるグループである。その数が7億5000万人。そしてこのグループの中で、英語を駆使できる人間がどんどん増えているのは、日本の現状を見ても容易にうなづけるであろう。

ここで注目しておきたいことがある。第2、第3のグループを合計すると11億2500万人くらいになる。これは第1言語話者の3倍に近い。3対1である。この意味は小さくはない。つまり英語はもはや母語話者の手を少しずつ離れはじめたと見るべきであろう。そうなると、母語話者は自分たちだけが英語に関する唯一のスタンダードだなどと言っていることはできなくなってくる。彼らはもはや英語のお師匠様の地位を脅かされているのである。自分たちだけがsit backして、「さあみんな、がんばりなさいよ、私が教えてあげるから」という時代ではなくなりつつある。残念ながら、そのことに気がついているネイティブ・スピーカーはそんなに多くはない。

さて、そういう状況を踏まえて、デイビット・クリスタル教授は

「英語は20世紀、国際語として登場してきた。英語は21世紀、
世界語として出発しようとしている」

と述べたのである。そして「地球語としての英語」の中で

「次の1世紀、人類の言語の歴史で決定的なことが起こるかもしれない。世界語の登場である。その登場はただ1回きりということになるかもしれない。いったんそれが生まれると、それを変えるには革命的なことが必要になるだろうからである」

と予測している。

さて、私はここまで、今の地球上において英語が数の上で圧倒的なパワーを持っているということを中心に述べてきた。そして、英語がもはやそれを第1言語として使っている人の手を少しずつ離れつつあるということも述べた。世界各地で使われはじめた英語のいわばそれは「親離れ」である。その親離れ現象についてもう少し見ていきたい。

ここからは青山学院大学教授の本名信行氏が「英語展望 No. 107」に書いておられることから（「英語はアジアの共通語」）資料をお借りしたい。氏によれば、英語の広範囲な使われ方について

アジアでも同様で、英語はアジアの言語でもある。英語はアジア各地の街角、商店、学校、官庁、そして職場で、頻繁に使われている。アジアには中国（12億）、アセアン（5億）、そしてインド（10億）という巨大な地政学的なブロックが存在し、英語はさまざまな地域言語と役割を分担しながら、きわめて重要な国内、国際言語となっている。（中略）

これを日本人の立場からいうと、英語は英米人とだけ話すことばではなく、ドイツ人とイタリア人とも、中国人とも韓国人とも、アラブ人ともトルコ人とも、アフリカの人と

も南米の人とも交流するのに有効なことばなのである。つまり、英語が国際言語になったということは、英語が多国間、多文化間コミュニケーションの道具になったということなのである。私たちはとりわけ、英語をアジアの中で使うことが当たり前になっている。

これはいわば前置きであるが、私が注目したのは、これらの人々の頭の中には、「英語を使いながら英語の背景となっているその文化には、興味を示さなくなりつつある」という現象が起こっているという指摘である。このことは英語を「準公用語」としているインドの事情をみると、はっきりする。インド英語の社会言語学的研究をものにしたS・V・パラシャー (S. V. Parasher, 1991) がインド人になぜ英語が必要かと聞いたところ、次のような順位で理由があった。このような認識は、第3世界でだいたい共通している。また、いくつかの点を除けば、世界の多くの地域にもあてはまる。

- (1) 科学技術の分野で最新の情報を獲得するため
- (2) 国際コミュニケーションのため
- (3) 母語の違うインド人とのコミュニケーションのため
- (4) 高等教育のため
- (5) 世界の情報を得るため

興味深いことに、「英語国民の文化を理解するため」という理由は、回答者の過半数の賛意を得られず、全く低位であった。また、インドの学校で、どんな英語を教えるべきかと質問したところ、インド英語を教えるべきであるという意見が強く表明された。このようなはっきりとした意見は、アジアでもめずらしい。

インドで学生が学びたい英語の変種

アメリカ英語	4.0%
イギリス英語	33.5%
インドの教養のある人々の使う英語	60.8%
その他	1.7%

以上の結果として文化的背景から離れた「世界諸英語」という考え方が出てくる。ちょっとここは個人的な理由もあってラリー・スミス氏の考え方を紹介しておきたい。彼は世界諸英語学会 (World Englishes) の初代会長であり、World Englishes の発刊と編集に大きな役割を果たした。以下の彼の意見である。(1983)

“When any language becomes international in character, it cannot be bound to any culture. . . . A Japanese doesn't need an appreciation of a British lifestyle in order to use

English in his business dealings with a Malaysian.... English... is the means of expression of the speaker's culture, not an imitation of culture of Great Britain, the United States or any other native English speaking country.”

「個人的な理由」と書いたが、私にとっては懐かしいラリー・スミスさんなのである。今を遡ること30年前の1971年～1972年、私はハワイ大学の大学院生でありイースト・ウエスト・センターで学んでいた。その時にイースト・ウエスト・センターの Culture Learning Institute に若き日のラリー・スミスさんがいた。彼は私が大学院に出すペーパーの英文のチェックをすべてしてくれたのである。後に大物になるラリー・スミスさんを、私はなんと家庭教師がわりに使ってしまったというわけである。「人は多くの人の世話になりながら育つ」という原則に依拠してラリー・スミスさんも許してくれるであろう。ちょっと話がわき道にそれた。要するに、私が言いたいのは次の2つである。

- (1) 英語は母語話者の手を離れて、世界語となりつつある
- (2) 世界でコミュニケーションをはかるためには、その利便性という意味で今は英語になっている

さてこのままにしておく、私は誤解を受けそうなのでやはりつけ加えておきたい。私は「英語絶対主義」には立たない。英語以外の諸言語の重要性を見すごすことはできない。ただ私は、たまたま英語についてやってきたので、英語についてそれなりに考えてきた。そしてその話をする。そうすると「英語のことしか考えない単細胞」と他の言語をやっている人から見られがちとなる。私は他の言語をやっている人にもお願いした。今の時点で日本人が、ドイツ語やフランス語やスペイン語や中国語や朝鮮語をやる意味を考えてほしい。10年前や20年前や30年前と世界の情勢はあきらかに違っている。だとすれば、諸言語を学ぶ意味も以前と同じであってよい筈はない。ましてや最近の情勢の中では中国語や朝鮮語をやる意味はどんどん重くなっているはずだ。英語の位置を非難するだけでは何の問題も解決しない。私がちょうど英語の位置について考えてきたように、それぞれの言語の担当の方は、それぞれの言語の位置についてお考えいただきたい。（もう考えておられるかもしれませんが。）そしてそれを発表し、私たちが納得させてはいただけませんか。

さて、話をすこし元に戻したい。問題は、国際交渉能力である。それでは国際交渉能力に用いられる英語のレベルとは、どの程度のレベルなのか。それについて次に考えたい。

11. 国際交渉力に用いられる英語のレベルとは

寺澤芳男氏という人を御存知であろうか。米国野村証券社長としてアメリカ在住22年、まさにビジネスの世界で英語を駆使してこられた方である。その後日本政府の要請によりM I G A

(多国間投資保障機関)の初代長官を4年間なされた方である。任期が終了された後は政界に転じ参議院議員になられた。この人に次のような発言がある。

もちろん、アメリカでも中西部のわかりやすい発音で、それも外国人であるほくを意識して適度な速度で話してくればわかる。外国人はほく1人というグループになると、もうまったくお手上げである。国際機関のM I G Aでも、外国人のひどいアクセントの英語や、辞書にも出てこないようなイギリス人の気取った英語、そしてなりよりも長ったらしい官僚英語に悩まされた。チェアマンとして会議の進行役をしているのに、会議出席者がしゃべっている内容が分からない。まさに悪夢だ。仕方がなくわかりやすい発音をしてくれるアメリカ人を隣において、「通訳」をしてもらったほどだ。ほくはそうやって悪戦苦闘しながらM I G Aの仕事をしてきた。

英語というのは、それほど難しい。母国語として小さい頃から身につけていない限り、つまり後から学んだエデュケイテッド・イングリッシュ (educated English) である限り、ほくたちの英語が使える範囲は限られていると思ったほうがいい。ほくは現在でも研鑽の日々で、英和辞典をいつもポケットにしはせている。

(「英語かオンチが国を亡ぼす」新潮社)

国際交渉能力の英語などと簡単に言うが、求められるのはこのレベルの英語である。しかも彼は次のようにも続ける。

でもこれからはそれでは通用しない。日本のエリートも、英語を難なく駆使できるようにならなければ、仕事ができない時代になる。ほくは口を酸っぱくして、ここで警鐘を乱打したい。「英語なんて自分には関係ない」という変なプライドを抱えて、豪も反省しないエリートは、ほくの世代で間違いなく終わりになる。そうならなければ、日本はアジアの孤児、そして世界の孤児になってしまうだろう。

すこし引用が長くなるが、もう少し続けたい。

英語の分からないリーダーは日本だけ

日本の知識エリートたち、指導者たちが英語ができないというのは、かなり深刻な問題だ。

世界の英語をめぐる状況は、30年前とはまったく違ってきている。今や、英語ができないリーダーなどというのはほとんど存在しない。

あれだけ英語を嫌っていた誇り高いフランス人やイタリア人のリーダーたちが英語を

しゃべるようになった。アジアの指導者たちも英語が堪能で、APECの会議をリードしている。アジアの国々の知識人たちはみな、アメリカやイギリスの大学に留学している。それが大蔵大臣をやっているわけだから、英語が話せるのは当然かもしれない。

世界語になってしまった英語を「分からない」と平気でいえるのは、日本のリーダーだけになってしまった。問題はそこだ。英語が分からないリーダーがいるのは「オンリー・ジャパン」なのだ。ここまでいけばユニークな存在だ、と開き直っていても仕方がない。

国際機関で働いてみると、英語は世界語なんだということがよく分かる。ぼくのいたMIGAは小さな国際機関だが、長官室は日本の大臣室より大きい部屋で、世界中の大蔵大臣が恭しく入ってくる。彼らはそろいもそろって、みな立派な英語を話す。4年間のMIGAの長官時代に会った各国の大蔵大臣の中で、通訳を付けてきたのは中国だけだった。しかも中国の大臣が付けたのは、日本語ではなく英語の通訳だった。

国際機関では、相手がどこの国の人であろうが、どんな皮膚の色をしていようが、コミュニケーションの手段は英語だというのは常識なのだ。そして、ほとんどすべての国のトップは、このコミュニケーションを通訳なしで行うことができる。

日本の大蔵大臣は通訳なしだった。しかしそれは、ぼくが日本人だったからである。

日本が、英語を基礎に持つ国際交渉能力を備えた人間を育成する必要を私は主張している。政治の世界でも経済の世界でも、タフな交渉の場に臨んで、力を発揮する英語力の養成である。そしてそのレベルは、例えば寺澤芳男氏にして「英和辞典をいつもポケットにしのばせ日々これ研鑽」というレベルの英語なのである。

それではこういうレベルの人間を養成するに十分なシステムを、わが国の英語教育は持っているのだろうか。答は残念ながらNoである。このままでは、私たちは次の世代の育成に責任を果たしているとはいえない。そのことを本格的に考える前に、英語教育の現状を少し見とおこう。

12. 英語教育のげんば

生徒が少しずつ変質をはじめている。藤沢市の教育研究所の調査によるとここ10年で生徒の学習意欲は半分以下になっている。

私の尊敬する中島洋一氏（現富山県砂波教育事務所指導主事）にその体験の一端を語ってもらおう。

筆者の場合は、学校が荒れたことだった。

中でも、最初の学校では、シンナーを「アンパン」と呼び、常習的に吸っている生徒た

ちがいた。シンナーやトルエンを盗み、みんなでわけてパーティをする輩もいた。ぞっとしたのは、空き缶にシンナーを入れ、自転車に乗りながらそれを口にくわえて登校してきた生徒がいたときだ。完全に目がうつろで、顔は青ざめ、支離滅裂なことをわめいていた。取り押さえた教師の形相は今でも忘れられない。

多くの教師たちは、いけないことはわかっている、力でしか解決できないと思った。それが悪循環となり、後で強烈なしっぺ返しが来た。

ある日、校内放送で、生徒会の役員が「皆さん、校内暴力を起こしましょう」と呼びかけた。ガタガタと何かが崩れていくような予感があった。毎日のようにいたずらで火災報知器が鳴らされた。消火器がばらまかれ廊下が真っ白になった。木刀とチェーンを片手に20人で、隣の学校をしめに行ったという連絡を受けて、教師たちが慌てて車で追いかけた。しかし、間に合わず血だらけになった生徒たちを前にして、自分たちの無力さを感じた。

授業中は、自由に教室に出入りした。教室の後では、音楽をガンガンかけてツイストを踊る。集団で廊下を徘徊するというのもしょっちゅうだった。生徒どうしが喧嘩になり、それを止めに入った教師が逆につるし上げられた。自己防衛のため、教師たちはいつしかネクタイをはずしていた。教頭先生が集団に取り囲まれて、空き教室に連れて行かれ、土下座させられるという事件も起きた。短ラン、長ランの学生服を着込み、裏地には登り龍のデザインがあった。威嚇のためにナイフを所持する生徒もいた。

荒れたクラスや学校にいますと、元気が吸い取られていく。朝起きてはため息、廊下を歩いてはため息、授業開始のチャイムを聞いてはため息が出た。毎日のように問題が起き、その事後指導に追われ、学校を出るのはいつも9時を過ぎた。心身ともに疲れ果て、年休を取ろうと何度思ったことだろう。ある日、重い足取りで学校へ行くと、学年8人のうち5人が年休を取っていた。みんなそれほど追いつめられていた。

(「Step 英語情報2002.3.4」)

実はここから中島先生の実践がスタートする。力のある中島先生であればその英語の授業がこの後に続く。しかし、普通の教師ならここで挫折するのではなかろうか。

ところで、こういう種類の話は最近珍しくなくなって来た。私の教え子は大阪府の中学校の教師になったが、英語の授業中に黒板に向かっていた時背中をめがけて黒板消しが飛んできたという。夏休みまでかなり体重を減らした。また岡山の結婚式に出かけたときに会った別の教え子も経験したことのない状況に直面していた。女性である教え子に私が

「身の危険を感じる？」

と聞くと、

「感じます」

とはっきりとした返事が返ってきた。生徒（中学生）に「殴られるかな」と思ったときも何度

かあると言う。教員全体で、校長に
「ここまで来ては警察を入れるしかないのではないですか」
と交渉したそうだ。校長を経験したこともある私は
「それで校長さんの返事は？」
と聞いてみた。校長の返事は
「それをやると、もっとひどいしっぺ返しが生徒からくる」
というものだったそうだ。先生方も譲らず
「それでは、私たちの身の安全はどうなるのですか」
と詰め寄ったという。

今では、校内放送に「校長先生、内線〇〇番が入ってます」と流れればそれが暗号の合図で、学校のどこかで事件が起きたから「全員職員室に集まれ！」という意味になっているということであった。私としても英語教育に情熱を持って送り出した教え子がこういうところで悪戦苦闘しているかと思うと辛い。先日見知らぬ先生からおおよそ次のようなメールが入って来た。北海道からである。

生徒が授業中に勝手に席を立って出歩きます。廊下にも出ていきます。友だちどうして話をしている私に私の言うことなど聞きません。

もちろん普通に授業がおこなわれている学校のほうが多い。しかし異常な状態の学校の存在が珍しくなくなってきているのも事実である。1996年の段階で、旧文部省発表の調査によれば、生徒が教師に暴力をふるったケースは公立中学校595校で1,316件。1,432人の生徒が1,402人の教師に暴力を振っている。この件数は前年度より5割増である。そしてこの数字は82年度に調査を始めて以来最悪だそうである。文部科学省になっての調査では昨年（2001年）全国の公立の小・中・高校で起きた校内暴力事件は33,129件。小学校だけでいうと1,464件で前年度より133件の増である。また警察庁によると中学生が校内で教師を殺害して補導された事件は過去に例がないそうだ。これについては千田潤一氏（TOEIC Friends Club カウンセリング・ディレクター）が下野新聞の取材記事のコピーを私に寄せてくれた。衝撃的な内容なので一部を紹介したい。その前に、ちょっと述べるとこれは1996年1月28日黒磯市北中学で英語担当の腰塚佳代子教諭が1年生男子に刺殺された事件である。

少年は英語が大嫌いだ。授業の前には必ずとっていいくらい、保健室に逃げ込んだ。授業に出ても、ノートの切れ端に「サボりてえな」「保健室、行っちゃおうかな」と書いて、みんなに回した。

その日も英語の3時限目を前に、保健室に足が向いた。

(中略)

程なく少年は、ポケットからバタフライナイフを取り出した。

カチャ。

カチャ、カチャ。

カチャ、カチャ、カチャ。

鋭い刃が見え隠れする。二つに分かれたさやが何度もぶつかり合って、冷たい金属音が廊下に響く。

いら立ちをぶつけるように、ナイフを回し続けた。

真っすぐ教室へ行かずトイレへ。1分でも1秒でも英語に出たくない。

授業開始から約10分遅れで教室に入った。腰塚佳代子教諭(27)は2人に軽い注意を与えた後、「授業が終わったら廊下に出てね」とつけ加えた。

席に着いた少年は「殺してやる」とつぶやき、ずっと女性教諭をにらみ付けた。

授業の終わりを告げるチャイム。

「トイレにそんな時間かからないでしょう。何をやっていたの？」

「気持ちが悪くて吐いていました」

とっさに、うそをついた。

「それなら保健室に戻ればよかったじゃない」

「戻っても(教室に)帰されちゃうんです」

いら立ちは一層強まり、ムツとする。

「私何か悪いこと言った？」

「言ってねえよ」

「言ってねえよ、じゃないでしょう」

「うるせえよ」

驚かしてやろう。間髪をいれず、腰塚教諭の首にバタフライナイフを突き付けた。

思わず後ずさり。「何をやるの冗談でしょう？」

「ばかにされている」。そう受け取った。

この間、少年は隣に立っていた級友の存在が、ずっと気になった。

「示しがつかない。(ナイフを)出した手前、もう引っ込みつかない」

(腰塚教諭が)死んでも構わない。「ふざけんじゃねえ」

腹部を狙いナイフをひと突き。刃先が左胸にスッと吸い込まれた。

「キヤーッ」

級友は突然の出来事に動転し、教室に駆け込む。

隣の教室から飛び出した男性教諭が止めるまで、少年はすごい形相で何度も刺し、けり続けた。

学校に行けない教師が増えている。三楽病院（東京）の調査によれば2001年中に300人の小、中教員のカウンセリングをしたそうだが、その数は10年で2倍になっているという。30～40代の教員が突然学校に行けなくなるそうである。泰政春教授（大阪大学大学院）の調査によれば（「現代の教育状況に関する意識調査」）小学校で46%、中学校で47%の教員が「教師を止めたい」と考えたことがあるそうだ。

私には100人の人間がいたら、100人が100人とも英語大好き人間であるなどと考えることは不可能だし、非現実的である。次は1999年2月15日の読売新聞の社説の中からである。

文部省の教育課程審議会の委員をつとめたことのある作家の佐藤愛子さんが以前、こんなエッセーを書いていた。

〈勉強の嫌いな子供がいる。すると勉強の嫌いなのは教え方が下手だからという原因が即座にあげられる。しかし教え方とは関係なく、勉強すること、じっとしていること、暗記すること、集中することが嫌いな子供は現実にいるのである〉

そして現在では139,000人が不登校でありこの数字は毎年最高を更新中である。そのすべてが勉強嫌いばかりが理由であるとは言えない。だがそれが大きな分野を占めていることは想像に難くない。現在の教科指導が最大領域を占める学校制度は、制度疲労を起こしている。その結果が2001年8月23日の私の読売新聞「論点」への寄稿となったのである。

故小渕首相の私的懇談会が2000年1月に報告書「21世紀日本の構想」を出して以来、いわゆる英語公用語についての論議が高まってきている。

英語はいまや全世界の4人に1人が話すグローバルスタンダードである。英語を第2公用語とした長期戦略を国としてたてておかなければ、日本は国際社会から脱落しその将来はないというのが、報告書の発想だ。

大所高所からなされるこうした議論の主旨に、異論はない。ただし、長年英語授業実践学に携わる研究者の1人としては、これらの議論が、わが国の英語教育の現場を踏まえて行われているかどうかについて、疑問を感じている。1984年に、ある大学の研究グループが中学生を対象に行った調査では、「英語が好き」「どちらでもない」「嫌い」と答えた割合は、いずれも3分の1程度に分かれた。その後、英語の授業の世界では大きな変化が起こった。英語指導助手の導入である。

現在では、英語を母国語とする6,000人以上の若者が全国の中学や高校の隅々まで入り込み、英語の授業を、従来の訳読文法方式からコミュニケーション中心へと引っ張った。英語による多種多様なゲームを持ち込んだのも彼らである。日本の英語教師も影響を受け

た。

いまや、「楽しい授業」というのは大きな流れである。しかし、それでは、生徒は英語が好きになったのだろうか。

旧文部省が96年3月に発表した調査では、「英語が嫌い」は、中学1年27.4%、同2年28.2%、同3年40.6%で、84年調査と基本的に変わっていない。それどころか、高校入試直前の中学3年の場合、英語嫌いはかえって増加している。

この事実をどう考えるべきなのだろうか。こうなっては、教師の教え方だけに責任をかぶせるわけにはいかない。システムのどこかに欠陥があると考えの方が自然である。

まずその1つ。百人が百人、英語が好きだなどということはありえない。全員が英語大好き人間などになったら、それこそ異常である。好きな生徒もいるが、嫌いな生徒もいる。

それにもかかわらず、嫌いな生徒を机に無理矢理座らせて、英語の語句の1つ、2つを覚えこませるために英語教師はどれだけ膨大なエネルギーを費やしていることか。授業中、黒板に物を投げつけられ、どれだけの教師が胃に穴をあけるような経験をしていることか。

こういう状態に対してどうすればいいのか。最も現実的な方法の1つは、英語選択性を実施することである。

来年4月からスタートする総合学習によって、多くの小学生は、英語に触れることになる。その土台の上にならば、中学以降の英語の授業は、学ぶ意欲をもっている生徒に自らの意志で選択させるようにすれば、英語の嫌いな生徒を机に縛りつけておくような愚は避けることができるのではないか。

ただし、その後、英語をやろうという志を抱く生徒が出て来たときには、そういう生徒を受け入れるコースをいつでも準備しておく。それによって、英語教育を巡る現在の問題は大幅に改善することが期待できる。

教師にとっても、「英語をやりたいと思っている生徒に囲まれて、英語を教えることのできる教室」というのは理想の教育環境なのである。その中から、英語を駆使して国際舞台で活躍する人材が出てくる。

公用語論という高邁な議論をすることも大事ではあるが、いま必要なのは、いわばその基礎工事の部分で、現在の教育システムを改善していくことである。柔軟な教育制度を同時に作っていかなければ、英語公用語論が絵に描いたもちになる心配がある。足元の改革にも目を向けようではないか。

13. 大きすぎるギャップ

今までのところ、私は現在行われている英語教育の問題点の指摘をしてきた。問題点を指摘した以上、その解決への方向への私の試案も提出したい。その前に問題点を簡単に整理してお

きたい。

1. 国際交渉能力を持った人間の養成が急務であること
2. その土台として英語の高度な能力をつけてやらなければならないこと
3. 日常におこなわれている英語教育の現状

このところで私が強調したいのは英語公用論などで表明されている期待学力と、現在学校でおこなわれている英語のレベルのギャップである。公用語論で求められているのはそれぞれ「日々身辺から今でも英和辞書を離さない」という研鑽を要求されるレベルである。一方中高の英語教育の実情を見ると「英語など、くそくらえ」という大量の生徒を抱えているのである。ここに大きなギャップがある。ギャップなどという生易しい話ではない。私にはグランドキャニオン大渓谷の10倍位のギャップがあると思う。中学から大学までおこなわれている英語教育の現状を知る者としては「どうやってここから国際交渉能力にふさわしい英語力を持った人間が出てくるのか」という疑問に圧倒されている。多くの議論ではあり方や理想は述べられているが、そこにいたる土台づくりの方に目が全然向いていない。ほぼ義務教育的におこなわれている学校での英語教育をそのままにしておいて問題が解決するわけではない。

14. 会議の英語と挨拶の英語

私が「会議の英語と挨拶」という考え方を提案したのは今から26年前の「英語展望」（日本英語教育協議会）のNo.52においてであった。その小論は、ほとんど誰の注目も浴びなかったと言ってよい。1つには、勿論私の力不足もあるが、次期尚早ということもあったのだと思う。しかし今になって、ようやく多少の現実味を帯びてきたように思う。私は当時次のように書いた。

私は、今要求されている英語のレベルを2つに分けてみたいと思う。そして最初のを「会議の英語」と呼んでみよう。それは、外交交渉の国際的レベルの場において、重みのある内容を正確に相手に主張することのできる英語、あるいは、対立点、論争点をはっきりさせ、相手の質疑に自在に対応できる力、そういうことを通訳をまじえずに、自ら英語を駆使して第1戦に立てる人間の持っている英語力と一応規定してみよう。ただし名前が「会議の英語」であっても、別に会議にだけ使われる英語というようにその「場所」を限定するものではない。日本の学者がアメリカに招かれて、大学で講義や講演をするのも会議の英語であり、民間会社がアメリカの会社を相手に、複雑な商取引でやりあうのも会議の英語である。要するにそれは、要求される英語の高度なレベルに対してつけられる呼称である。

これは明らかに本稿で言うところの国際交渉能力である。2つ目の「挨拶の英語」については次のように述べた。

「会議の英語」が少数精鋭主義の英語の秀才コースであるのに対して、「挨拶の英語」は文字通り、“Good morning.”と言える英語であり、カタコトの英語であり、観光旅行の英語である。

そのあといくつかの例を挙げている。

まずその1。高校生、大学生、一般大衆の海外旅行に出かける数が飛躍的に増大していること。夏休み終了後の最初の英語の時間、「どうだ、何か変わったことはなかったか」と声をかけると、「ずっとハワイにいました」などという返事が返ってくる。「英語はしゃべれたか」と聞くと、「むこうの人は、よくしゃべりました」などと人を笑わす。サンフランシスコに行った者、アメリカのディズニールランドを訪ねた者、その数は毎年増加している。彼らの英語は「挨拶の英語」である。

その2。英語に直接ふれた体験は、外国にでかけた者だけに限らない。英語サマー・キャンプで、たどたどしい英語で自己紹介をし、とにかく意志の疎通をしてきた生徒の増えていること。

その3は一般社会人のことなので省略して

その4。今度もまた私の学校では他教科の教師が夏休みに何人か海外に出かけた。帰ってきて彼らの感想の1つは、いつも同じで

「ちょっとでもよいから英語が話せたら」である。

その5。アメリカ人が、私のクラスに来たことがある。簡単な questions and answers で彼に自分の英語が通じたと興奮する生徒たち。あんなよろこびの姿を授業の中ではめったに見せない。(この頃まだALTの制度はなかった)

その6。学校の文化祭ともなれば、訪れる2、3の外人に、ろくすっぽ英語が話せなくても勇敢に案内を買ってでる生徒の増えていること。

その7。3人のアメリカ人高校生が私たちの学校を訪れたことがあった。彼らと生徒たちの間には、むつかしい議論も、対立点の討論もない。ガールフレンドはいるかという問に対して、Yes とかえてきた返事に全体がどっと沸く。そこに同時代に生きる若者たちの共感がひろがる。

具体例を挙げるのはこの辺でやめたい。こういう例を挙げ出したら枚挙にいとまがない

からである。しかもこういう状況は、私の勤務校にだけ起こった特殊現象ではなく、大なり小なりどこの学校でも起こりつつある。そしてこういう傾向はますますさかんになるであろう。たしかにそこで使われている英語のレベルは低い。数も間違いだらけだし、時には時制もめちゃくちゃで相手のアメリカ人の目を白黒させる。しかし、そんな間違いにおかまいなく、英語という言葉が人と人とを結びつけていく。こうしてカタコト英語による小さな親善の輪があちこちでひろがっていく。それは疑えない事実である。

以上の引用は、もう一度ことわっておくが26年前の話なのである。話を現代に戻そう。私は1994年から1998年までの4年間京都教育大学附属京都中学校の校長の任にあった。任期の2年目からタイの古都アユタヤにある地域総合大学の附属中学校と姉妹校提携を結んだ。その結果として生徒の相互交流がスタートした。

15人の生徒さんが京都中学校にやってくる。1週間、私たちの生徒と一緒に肩を並べて附属京都中学校の授業に参加する。そして私たちの生徒も15人、タイのアユタヤの中学校で学んで来る。

私たちの生徒は、こちらの授業が終わる12月の下旬に出かけた。これはいわば真冬ですから、結構寒い。その寒さの中から関西空港を飛び立ち、タイのバンコクに着いた時には30度近い暑さであった。慣れない初めての外国への旅行と緊張感で、体調を崩す生徒が出てきても不思議ではない。

ここからは団長であったM君の帰国報告を聞いていただく。

タイ訪問を終えて

タイに行くことが出来て本当によかったものすごく思います。その1つの理由にホームステイがあります。ホームステイに行くまでは、自分自身不安があったのですが実際に家族と話すとても楽しく逆にこれからのホームステイに大きな期待を持つことが出来ました。特にタイのお父さんがとても日本語がうまいことに驚きました。僕がホームステイに来ることが決まってから日本語を習いにいかれたそうです。一分一秒が楽しく過ぎていったのですが、ホームステイ2日目に急にお腹が痛くなり、お父さんに連れられて病院に行きました。何度も何度も「痛くないですか」と日本語で聞いてくれてものすごく心配してくれました。病院を出て家に帰る時、僕は家族全員に謝りました。そうしたらお父さんがこう言ってくれました。「私の息子なのだから気にしなくていい」これを聞いた時、泣きそうになりました。昨日会ったばかりであと2日したら帰ってしまう人にこんなことは普通は言えないでしょう。そしてお母さんが早く寝たほうがいいと言ってくれた時、日本にいるようなそんな感じがしました。人の温かさをタイでは感じ、しっかりと学んできました。そしてその成果を様々な所で発揮していきたいと思います。本当にタイに行けて

よかったです。

「日本にいるようなそんな感じがしました」というのは別の言い方をすれば、人の暖かさは国境を越えるということであろう。彼にとってはタイに暖かいホストファーザーがいて、ホストマザーがいて、ホストファミリーがいることを実感してきた。タイのお父さん、お母さんも、日本の京都で自分の息子と同年代のホストサン（息子）が成長していることを実感しているであろう。この帰朝報告に接し、私の胸も思わず熱くなった。もう1つタイからの生徒を受け入れた京都のホストマザーの話を聞いてほしい。

ホストファミリーのつぶやき

あの子はやって来た。名前はサンジャー・スイティクル。ホストファミリーを軽い気持ちで引き受けたものの、「どうしよう」を全身に張り詰めて待っていた。料理はどうしよう。家中を大掃除しなくっちゃ。どこに連れて行けば喜んでくれるのかしら。もしかしたら大変な豪邸に住んでいて、夜はふわふわの布団で寝ていて…。一方わが家は恐怖の重し布団。家は狭いわ、犬臭いわ、散らかっててくちゃくちゃだわ、どうすればいいの！

ところが、なるようにしかならないというか、案ずるより産むが易しというか。最初、子ども達も張り切ってはいたものの、うーん、英会話は…と、顔だけ前に向いてはいても、首から下は後を向いて、に近かったのに、自分の英語も通じると分かったとたんにおしゃべりさんに大変身。ついに自信？に満ちたものになり、すっかり意気投合。夜は折り紙をしたり、本や図鑑を拡げて、タイではこうよとか、日本ではこうだと、みんなで大騒ぎをして大輪の花を咲かせた。話とはめどなく広がり、ついに私の一番恐れていた歴史上の事や、日本固有の説明が日本語でさえ難しい事を、子ども達から次々と聞かれて、えっ、そんなのちょっと待ってよ（やはり来たか）と、こちらは英語以前の日本についての教養度に冷や汗をかきかき、考え込んで中断だらけの説明と辞書引きに大わらわ。それでもみんな世の更けるのもすっかり忘れ去り、すべてが楽しくって仕方がなかった。

国という背景の違いに、戸惑いと驚きと共に、同じじゃないのという思いの渦巻く中、彗星のごとくきらめきを残して、あの子が帰ってしまった。寂しい。だから手紙をみんなと書こうと決めた。

「…どうしているの。また逢いたい。日本の両親と妹と弟より」と。

タイとの交流についてはまだまだ色々なことがあった。長くなるからこの辺で止めにするが、最後のお別れパーティで、何人ものタイの生徒が校長である私のところにわざわざやってきて
“I like Japan.”

とキラキラした瞳を感謝の心で一杯にして述べていったことを忘れることはできない。このよ

うに、皆さんもすでにお気づきだろうと思うが、現在の交流は26年前に挙げた例に比べて、質量ともに広くそして深さを増している。

さて以上挙げてきた交流の中で、仲立ちの役割を果たしてきたのはすべて「挨拶の英語」の領域なのである。そしてそのことについて私は次のように述べていた。

（国と国との関係というのは）今やこういう土台の上になりたっている。そして、実はこういう体験的レベルにおける接触こそが、国と国との結びつきをバック・アップする時代に今は入りつつある。この国民的な力が、国と国との関係を規制し、世の中の動きの根本をかたちづくっていくことになる。この力をみくびってはいけない。トップレベルにおける会議だけが、国と国とを結びつけるものではない。そのことは、過去の私たちの体験から痛いほどの教訓を得ているはずだ。

もう少し具体的な話をしよう。例えば日本と韓国の関係である。この両国は、結構対立する。教科書問題ばかり、慰安婦問題ばかり、靖国神社問題ばかり。今のところ日本は押されっぱなしだが、私はこの両国の関係については心配はしていない。理由は、草の根レベルのところそれぞれの国の人々が相手の国を大量に訪れているからである。最近是我们日本人にとって韓国が人気のある観光スポットであることを思い出してほしい。それらの人々がすべて英語を話しているかどうかは別として、大量に民衆が行き交う国の間では戦争などできるわけがない。京都教育大での英文学科の私の教え子は、今韓国にわたり韓国の男性と結婚して1児の母である。先日家族3人の写真が送られて来たばかりだ。7月23日の読売新聞はワールドカップの両国共催によって「韓国に対するイメージが良くなった」という人が47%に上ったことを伝えていた。

ところが、北朝鮮とはこうはいかない。同じ民族なのに先日も北朝鮮と韓国は銃撃戦をやったばかりではないか。日本に対してもミサイルや不審船やらと何かとキナ臭い。社会体制の違いということもあるが、これらの国の民衆レベルの人々が韓国や日本と大量に行ったり来たりするようになれば、攻撃体制などとれないのである。今はたまたま韓国に例をとったが、英語の視点からすればタイと交流した生徒のコミュニケーション・ツールは英語であったし、他の国との間でもさしあたり英語が用いられるであろう。

そこで私は26年前の話だが次のように述べているのである。

つまりここなんです、国と国とを結びつけるものとは何かということです。政治的にかなり険悪な関係にあっても、一般国民のいわば草の根的な接触がしっかりしていれば、両国の関係は安泰だという認識ですね。もうこれは立派な友好関係のための教育であり、ひいては平和教育です。こういうレベルにおける結びつきの重要さの意義はここにある。

こういう一般大衆的、庶民的な力が国と国の関係を規制し、世の中の動きの根本を形造っているんですよ。この力をみくびってはいけません。トップレベルにおける会談だけが国と国とを結びつけるものではありません。そのことは、過去の私たちの体験から痛いほど教訓を得ているはずで。ですから私の議論のスタートは「挨拶の英語」ですけれども、前にも述べたように私は単なる技術論を展開しているつもりはありません。根本的な私たちの姿勢を踏まえて英語教育の議論を展開しているつもりです。こう考えてきますと、「会議の英語」に対応する英語教育を考えるだけでなく、挨拶のレベルにおける英語教育の持っている意味にも目を向けなければならないことは、はっきりしてきたと思います。

以下拙著「英語を好きにさせる授業」(大修館)から引用したい。これは18年前に初版を出したが、今私の書きつつある文脈の中で、私自身変える必要を感じていない。

—それで、ちょっと気になるんですが、「会議の英語」の方はどうするんですか。

—大ざっぱに申しますと、「会議英語」志向型の英語の力に対応できるだけのシステムを「別枠」のコースとして持つことが必要でしょうね。もっと巾の広い、いろいろな人々のさまざまな要求に応じうる英語教育を考えなくちゃならないでしょう。会議の英語を必要とする人間は今増えていますし、ますますこれからも増加しますからね。

—そうですか、それを聞いて安心しました。先生はまた「挨拶の英語」を強調して、「会議の英語」を否定なさるのかと思ったのですから。

—そんなことはありません。両方とも重要だと、さっき申し上げた通りです。その上にたって、「挨拶の英語」の持っている意味が従来ないがしろにされてきたのではないかとやっているのですよ。今という時代は、あれかこれかと or で割り切れる時代ではないんです。社会が多様化し、要求も多元化している。そして、それぞれの要求が理由のあるものなら、それに応えられるように努力していくべきです。それは英語教育だって例外ではありません。従来の中におさまっているわけにはいかないでしょう。その上で、私は「挨拶の英語」はやがて発展して「会議の英語」の土台にはなるだろうけれども、現在の学校制度の中では、会議の英語を目ざすのは無理だとはっきり申し上げているんです。そういうことは、私がここでわざわざ申し上げなくても、英語教育に携わっている人ならみんな知っているはずで。教えている教師の方でさえ、「会議の英語」なんてあやつれる人はそんなにいないんですから。どうして教師以上の力を生徒が身につけられますか。ところがです。教師というのは、なんとなく「一生懸命やればどこまででもいけるんだ」という幻想を与えがちなんです。いや、むしろこういう傾向は教育という作用の持っている本質的な側面の1つかも知れません。たしかに、生徒に向かっては「一生懸命やれ」というのは意味がある。事実、そういう生徒たちの中から英語の面においても日本の将来を

担う人物が出てこなくちゃならないわけですから。しかし、システムとしては外部に向かってははっきりと、そんな要求には応えられませんと言うべきです。ここなんです、私の言いたいのは。もうそれははっきりさせるだけで、英語教育をめぐる議論のあいまいな部分がかかなりすっきりする。英語教育では何を目ざすのかと言われたら、「挨拶の英語」ですと答えようという訳です。現実的な問題として、「挨拶の英語」なら現在義務教育化している中学や高校の英語の授業の中でだって、教えることは決して不可能なんかじゃありません。

—なるほど、先生の考えが少しずつわかってきた。先生は「挨拶の英語」なんて教育的に果たして価値があるのかという疑問に答えようとなさってきたわけですね。

—そうです。そこで、私は今まで「挨拶の英語」の持っている意味というものをいくつか具体例を挙げながら、わかりやすく述べてきたつもりです。

—わかりました。庶民と庶民というか、一般大衆と一般大衆の草の根レベルにおける結びつきの重要性ということですね。

—そうです。そこでそれからもう一歩。つまり、これは平和教育だということなのです。国と国の結びつきが庶民レベルで広がる。広がるためにはどうしたってことばが必要です。それは別に英語に限らなくてもよいが、今のところさしあたり、英語だと一番広く世界中で通ずる。それを通じて、多くの小さな友好関係の輪を広げていく。国民同士が仲のよい時、国同士が戦争するなどというのは事実上困難です。ですから、それは、平和教育につながっていく。私は英語教育の目的として、平和ということ、最近かなり重く考えるようになってきています。しかし、その平和というのはそんなに大袈裟なことではない。平和教育などというところかなり大袈裟にひびきますが決して大袈裟ではなく、こういう挨拶の英語を身につけてやること、そしたらオーストラリア人でもシンガポール人でも、英語を話せるような人と積極的に交友を広げ、まず「今日は」「ごきげんよう」「あなたの国はどんな国ですか」といったようなところから始めたらいい。すべてはそこから始まるんです。生徒がもっと高度なコミュニケーションを要求するようになったら、決して挨拶の英語だけでとどまってはけませんよ。しかし、最初に break the ice がなかったら何もスタートしません。

—そういう意味でなら、平和教育というのかなり具体的でわかりよいし、実際の中学や高校での英語教育の場でもそれほどかけ離れたものではない。実現可能な気もする。確かに英語教育の目的が、実用論とか教養論とかのさらにその上に、平和教育だと聞かされた時は「何を大袈裟な」という感じがしないでもなかった。しかし、それと同時に、英語教育が平和教育のためだというのは、私は新鮮にひびいたのも事実です。

—今まで述べてきたのは「挨拶の英語」ですから、挨拶ができるという意味ではいわば英語教育実用論の範囲です。実用論ではあるが、それだけでもない。生徒の視野を広げ、

人と人をつなぎつけ、ひいては平和のためという見通しを踏まえた上での初歩的实用論ともいえる。そうなると、もうそれは単なる实用論ではないんですね。そしてそれは、何回目かの話し合いでも述べましたように、英語を習ったらそれを使って誰かと話し合ってみたいという、生徒の誰もが一様に抱く願いに応えていくことにもなるんです。

15. 英語教育改革試案

この稿の最後に私なりの英語教育改革試案を提示し、多くの方の御意見を頂戴したい。

英語教育改革・試案

(齋藤試案 2002)

前提 (挨拶の英語) と (会議の英語) の2つの領域を考える。

小学校 ⇒ (挨拶の英語) の領域

1. 教科として独立させる (総合学習から独立させる)。
2. 必修とする。
3. ねらい
 - (1) 英語 (外国語) を好きにさせる。
— 楽しさ中心の展開を考える —
 - (2) 異文化の背景を持った人々に自然に馴染ませる。
4. 到達目標
 - (1) 基本的な英語の表現を身につけさせる。
人間として礼を失しないための英語
— お礼が言える。
— お願いができる。
— あいさつができる。
など
 - (2) 日常よく使われる表現
— 自己紹介ができる。
— 助けを求める (ゆっくり話してもらうなど)。
— 買物ができる。
など

中 学⇒挨拶の英語の領域

1. 生徒の意志によって英語を選択させる巾をひろげる⇒現在の英語選択授業の質、量ともに拡大。
 - (1) 選択英語では当然のことながら「英語を学ぼう」と決心した生徒によってクラスを構成し、英語の授業をおこなう。前提は生徒に「選ばせる」こと。
 - (2) それに伴って現在の必修英語は、週2時間程度にする。必修英語の中身は、徹底した「挨拶の英語」の線をねらう。
 - (3) 小学校で何年間か英語に接してくる生徒が増えてくる。したがって中学に来た時に「選択英語をやるか、やらないか」のある程度の判断基準は持っていると思われる。
 - (4) そのうえ、中学入門時に中学でおこなう英語の授業について、英語の教師による数時間のオリエンテーションをおこなう。これは主に選択英語を「選ぶか、選ばないか」を判断するためのオリエンテーションである。英語の教師は、広く英語を学ぶことの意義を語りかける。
 - (5) 100人が100人、英語大好き人間ということは考えられない。英語を選択しなかった生徒が出るのは自然と考える。ただ彼らにも週2時間の必修英語は保証する。
 - (6) 選択しなかった生徒でも途中で考えが変わり「学ぼう」と決心した生徒は次年度の当初より、最初から選択英語を始めるクラスに受け入れる。
2. 選択英語を取らなかった生徒には、本人の学びたい他の教科の選択授業を取らせる。少なくなってきた時間数（週5日制）を全教科でチマチマと平均して分けるといふ愚を避ける。
3. 英語教師の抱えている最大の悩みは「英語に興味も関心もなく、英語をやりたがっていない生徒をどうやって机につかせ、英語にむかわせるか」ということである。そのために、どれだけ多くの英語の教師がエネルギーを浪費していることか。生徒による選択性の幅を広げることによって、選択英語はメインの内容を持ち始めるであろう。そこに集まってくる生徒は少なくとも自分の意志で英語を選んだ生徒である。英語教師が長年にわたって悩まされてきた「英語に関心もなく、やりたくもない生徒に英語を強制する」という、うっとおしい状況からかなりの程度解放される。英語をやりたいと思う生徒に囲まれて、英語を教えることができるというのは英語

教師にとってはいわば「理想の境地」ではないか。

4. これらの英語のクラスの中から、さらに希望する生徒については English Immersion High School への学習につなげていく。

高 校⇒挨拶の英語の領域と会議の英語への準備教育

1. 従来の高校路線に加えて、各県に1校 English Immersion High School を指定する。
2. ここより大学 Super Language Learning University につなげる。
3. English Immersion High School の授業はすべて英語で進める。
4. presentation, discussion, debate を中心の英語の授業にする。

大 学⇒会話の英語+挨拶の英語

1. 従来の大学路線については、学生の希望による選択性を大幅に取り入れることに加えて、日本の各ブロックに1つずつスーパー・ランゲージ・ラーニング・ユニバーシティを指定する。(関東2、関西2も可)
2. ねらい：国際交渉能力を備えた人材の育成。
3. 教授陣は外交、ビジネスの分野における経験者を中心に構成。
4. 授業は、presentation 技術、discussion 技術、debate 技術の養成を中心に据え、世界の政治、外交史、歴史、著名スピーチ研究、国際外交史、交渉史等。歴史に「もし」はないのだが、それぞれの重要場面において外交交渉による別の選択肢はありえなかったかの研究は必ず入れる。これはビジネス研究に於いても同様である。
5. 授業料半額は奨学金による。
6. 卒業ハードルは高くする。
7. 入学生←高校の English Immersion High School
8. 卒業生→ Super Language Learning University 修士課程へ。

以上は齋藤試案である。次の世代のために、このくらいの準備をしておくことは、今の世代の責任ではないだろうか。

参考文献

- 古川法子『英語が通じた』（『語研だより』154号）2002。
斎藤栄二、鈴木寿一編著『より良い英語の授業を目指して』大修館、2000。

英語教育改革試案（齋藤）

- 『編集手帳』（『読売新聞』）2002.7.17。
『読売新聞』2002.5.27。
中野好夫『人は獣に及ばず』みすず書房、1982。
『20世紀』角川書店
舟橋洋一『あえて英語公用語論』（『文芸春秋』）2000。
齋藤栄二『強制を排せよ—英語選択性の強化を視野に入れる—』（『聖教新聞』）2000.9.5。
平田和人『文部省戦後半世紀の外国語教育政策』（『英語教育』5月号別冊）大修館、2002。
『ケンブリッジ英語百科事典』ケンブリッジ出版。
デイビット・クリスタル『地球語としての英語』（c.u.p）1997。
本命信行『英語はアジアの共通語』（ECLC『英語展望』No.107）2000。
寺澤芳男『英語オンチが国を亡ぼす』（新潮OH！文庫）2000。
中嶋洋一『いよいよ始まる教育改革』（STEP『英語情報』3、4月号）2002。
下野新聞社報道部教師刺殺事件取材班『消されたチャイム』1998.2.25。
齋藤栄二『英語教育に要求される2つのレベル』（ELEC『英語展望』No.52）1976。
京都教育大学附属京都中学校『附属通信』52号1997。
齋藤栄二『英語教育に現場の声を』（読売新聞『論点』朝刊）、2001.8.23。
齋藤栄二『英語を好きにさせる授業』（大修館書店）1984

